

信州大学医学部保健学科
平成 29 年度
夏期海外研修プログラム実施報告書



2017

平成 29 年 11 月 30 日
信州大学医学部保健学科

信州大学医学部保健学科

平成 29 年度夏期海外研修プログラム実施報告書

編集：信州大学医学部保健学科 国際交流委員会

委員長：杉山 暢宏 (作業療法学専攻)

委員：伊澤 淳 (看護学専攻)

山崎 浩司 (看護学専攻)

山崎 明美 (看護学専攻)

奥村 伸生 (検査技術科学専攻)

小穴 こず枝 (検査技術科学専攻)

Ah-Cheng GOH (理学療法学専攻)

青木 薫 (理学療法学専攻)

佐賀里 昭 (作業療法学専攻)

事務部：丸山 恵 (学務第二)

川船 圭介 (学務第二)

I. 学術交流にあたって	・ ・ ・ ・ ・ 1
1. 学科長のことば	
2. 同窓会長のことば	
II. 学術交流の概要	・ ・ ・ ・ ・ 3
III. 信州大学医学部保健学科の国際交流プログラム概要	・ ・ ・ ・ ・ 6
IV. 信州大学—Curtin University	
大学間学術交流協定に基づく夏期海外単位認定プログラム	・ ・ ・ ・ ・ 8
1. カーティン大学の概要	・ ・ ・ ・ ・ 9
2. 平成 29 年度夏期海外単位認定プログラム	・ ・ ・ ・ 10
3. 研修プログラムの詳細	・ ・ ・ ・ 13
4. 学生アンケート	・ ・ ・ ・ 15
5. 学生レポート	・ ・ ・ ・ 25
V. 信州大学—シンガポール共和国	
夏期海外研修保健医療スタディツアープログラム	・ ・ ・ ・ 30
1. シンガポール共和国の概要	・ ・ ・ ・ 31
2. 保健医療スタディツアープログラムの概要	・ ・ ・ ・ 32
3. 研修プログラムの詳細	・ ・ ・ ・ 33
4. 学生アンケート	・ ・ ・ ・ 39

(編集後記に代えて)

I. 学術交流にあたって

1. 学科長のことば

信州大学医学部保健学科長 金井 誠



保健学科長
金井 誠

信州大学医学部保健学科では、国際交流委員会が中心となって、学術・教育面での国際交流推進に向けて取り組んでおり、本年度は2つの短期夏季海外留学プログラムを実施しました。Australia Curtin University 夏期海外単位認定プログラムには看護学専攻7名、検査技術科学専攻1名、理学療法学専攻8名、作業療法学専攻4名の計20名の学生が、Singapore General Hospital PTE LTD (Sing Health) 保健医療スタディプログラムには看護学専攻2名、検査技術科学専攻1名、作業療法学専攻2名の計5名の学生が参加し、総計で25名の学生が短期海外留学を経験いたしました。

本年度の特筆すべき点は、カーティン大学への海外留学プログラムを、初めて帯同教員無しで実施し、学生達は特に問題なくこの研修を終えてくれたことです。学生達のたくましい行動力に感心すると共に、グローバルに活躍できる人材への成長を確信いたしました。

帰国後のアンケートをみますと、参加者の殆どが、多くの刺激を受けて充実した短期留学を終えたことが窺えます。この体験で得た感性や知識が今後の学生生活、社会人生活で有意義に活かされるよう期待しています。

また本年度はシンガポール工科大学健康社会学院学科長のAlan Wong氏をお招きし、オープンミーティング等の開催を計画しています。本プログラム参加者だけでなく、大学院生を含めた多くの学生に参加していただき、国際的な視野を広げていただきたいと思います。

本プログラムの運営には、カーティン大学をはじめとする留学先との事前交渉、プログラムの作成、学生へのプログラムの紹介、航空券の確保と準備、支援金の確保、渡航中の学生の安全確保等のために多くの教職員が関わっています。関係した教職員の方々にこの場をお借りし感謝いたします。

また本年度も参加学生に対しては、日本学生支援機構の海外留学支援制度の採択を受けての援助をいただくとともに、本学からも「知の森基金を活用したグローバル人材育成のための学生への短期海外活動支援」より、参加学生および帯同教員の渡航費用の一部等にご援助をいただきました。加えて信州大学医学部保健学科同窓会の基金からもご援助いただきました。ご配慮くださいました信州大学本部役員の皆様ならびに保健学科同窓会の皆様に厚く御礼申し上げます。

2. 夏季海外研修プログラムを同窓会は支援し続けます！

保健学科同窓会長 川上由行(信州大学名誉教授・医学部特任教授)

平成 29 年度の夏期海外研修プログラムは、9 日間（8 月 4 日～12 日）のシンガポール保健医療スタディツアーのプログラムと、西オーストラリア州パースにあるカーティン大学における約 2 週間のプログラム（8 月 4 日～20 日）の二つの研修プログラムが行われました。

シンガポール保健医療スタディツアーは、2014 年に開始されて本年は 4 回目でしたが、今年 2017 年は、これまでで最も少ない 5 名の学生がこの研修プログラムに参加しました。また、西オーストラリア州パースのカーティン大学における研修プログラムへは、ちょうど 20 名の学生が参加しました。そして、これら二つのプログラムは、総ての行程をそれぞれ滞りなく終了して、参加学生の全員が元気で帰国しました。

この「夏期海外研修プログラム実施報告書」の別冊として発行されている参加学生の「学生レポート集」には、いずれの研修に参加した学生も、充実した海外研修の日々について記載しているのが印象的です。

特に、カーティン大学での約 2 週間の研修を体験した学生は、ホームステイを体験する中で、ホストファミリーを介してのオーストラリアの文化にも大いに触れる機会があったことを生き生きと記載しています。また、オーストラリアに於ける医療専門教育をカーティン大学の学生と共に受講する中で、相互間の英語によるコミュニケーションの大切さを肌で感じたことと思います。

多国籍国民が多いオーストラリアやシンガポールでの日々を体感し、国際的感覚を培う契機ともなるなど、更には日本を離れての生活から、自律性の重要性を確認する機会になるなど、大きな収穫があったと思います。

日本の外へ出て異文化に触れ、日本語ではない慣れない言語「英語」に囲まれて過した体験は、学生たちにとって実に貴重だったと思います。

今年度のカーティン大学での研修で特筆すべきは、従来の安全確保体制に加えて、保健学科独自の危機管理マニュアルを整備する等の万全の体制の中、この海外研修プロジェクトを開始以来、初めて教員が帯同せずに、学生たちだけで総てのスケジュールを遂行して来たことを挙げる事が出来ます。

海外研修プログラムに参加した学生が過ごすことが出来た、貴重な日々を蔭で支えた保健学科国際交流委員会の教員各位、そして、その円滑運営に労を惜しむことなく支援された保健学科教職員各位には心からの敬意を表します。本当にお疲れ様でした。

本プロジェクトは発足以来、着実に成果を上げて来ているのを実感させていただいております。今後は学术交流や大学院生相互間の交流等への進展にも期待したいと思います。また、カーティン大学、パース近郊の医療機関、そしてシンガポールの Singapore General Hospital 等を始めとする訪問先の各医療機関との友好的な関係を深めながら、この夏季海外研修プログラムがより一層の輝きを放っていくことを祈念しております。保健学科同窓会は、そんな「夏期海外研修プログラム」をこれからも支援していきます。



信州大学医学部保健学科同窓会
School of Health Sciences, Shinshu University

II. 学術交流の概要

1. 学術交流協定および学生の交流に関する覚書締結の経緯とカーティン大学交流実績

- 1) 1992年8月、イギリス、ロンドンで開催された第11回世界理学療法連盟学術集会に出席した信州大学医療技術短期大学部藤原孝之教授（現 郡山健康科学専門学校/東都国際ビジネス専門学校 理事・学校長）と、カーティン工科大学健康科学部ジョン・コール教授との間で教育・研究に関する情報交換が始まった。
- 2) 1997年3月、藤原孝之教授、楊箬隆哉教授（当時）およびゴウ・アー・チェン助手（現准教授）の3名が、カーティン工科大学副学長宛の本学学長親書を携え、健康科学部の遠隔地教育システムに関する資料収集、共同研究課題の打ち合わせを目的としてカーティン工科大学を訪問した。カーティン工科大学学長、健康科学部長、看護学科、医学検査学科、理学療法学科、作業療法学科等のスタッフとの会談の折り、両大学間の、より積極的な学術交流が話題となり、教員、学生交流の早期実現に向け検討することで合意した。
- 3) 1998年7月-8月、藤原孝之教授が文部省在外研究員派遣でカーティン工科大学健康科学部理学療法学科客員教授として滞在した折り、カーティン工科大学健康科学部スタッフミーティングに出席し、当該大学の多くの教官より大学間交流に関する質問を受け、同大学が信州大学との大学間学術交流に興味を示していることがわかった。
- 4) 1999年3月、本学藤原孝之、楊箬隆哉両教授がオーストラリアに出張した際、副学長ジョン・ミルトン-スミス教授、健康科学部長チャールズ・ワトソン教授、看護学科主任教授マイケル・ヘイゼルトン、理学療法学科主任教授ジョン・コール、国際教育課程担当パメラ・ロバーツ女史等と両大学間の学術交流推進を話題に会談した。両大学の資料を交換し検討した結果、単一学部間に留まらず、広い学際領域での学術交流を目指すことを目標にすることで合意した。その際、カーティン工科大学副学長から大学間協定に関する雛形文書を預かった。
- 5) 1999年4月、学術交流協定を締結した。
- 6) 1999年5月、横浜で開催された第13回世界理学療法連盟学術集会に特別講演演者として来日したジョン・コール教授が、信州大学を表敬訪問し特別講義を行った。
- 7) 2000年8月、学術交流協定に基づく学生の交流に関する協定書を締結。同9月、宮坂敏夫教授（短期大学部長）以下教官、学生20名がカーティン工科大学を表敬訪問し、各学局の国際交流担当者と短期留学の可能性を協議した。帰国後、部長のもとに5名からなるチームを置き、プログラムの実施計画を作成した。
- 8) 2001年8月、信州大学医療技術短期大学部学生32名がカーティン工科大学にて第1回夏季留学・単位認定プログラムに参加した。第2回以降の詳細は以下のとおりである。

第2回	2002年	27名	第7回	2007年	17名*	第12回	2013年	21名
第3回	2003年	24名	第8回	2008年	31名**	第13回	2014年	17名
第4回	2004年	20名	第9回	2010年	19名	第14回	2015年	18名
第5回	2005年	29名	第10回	2011年	17名	第15回	2016年	10名
第6回	2006年	28名	第11回	2012年	22名	第16回	2017年	20名

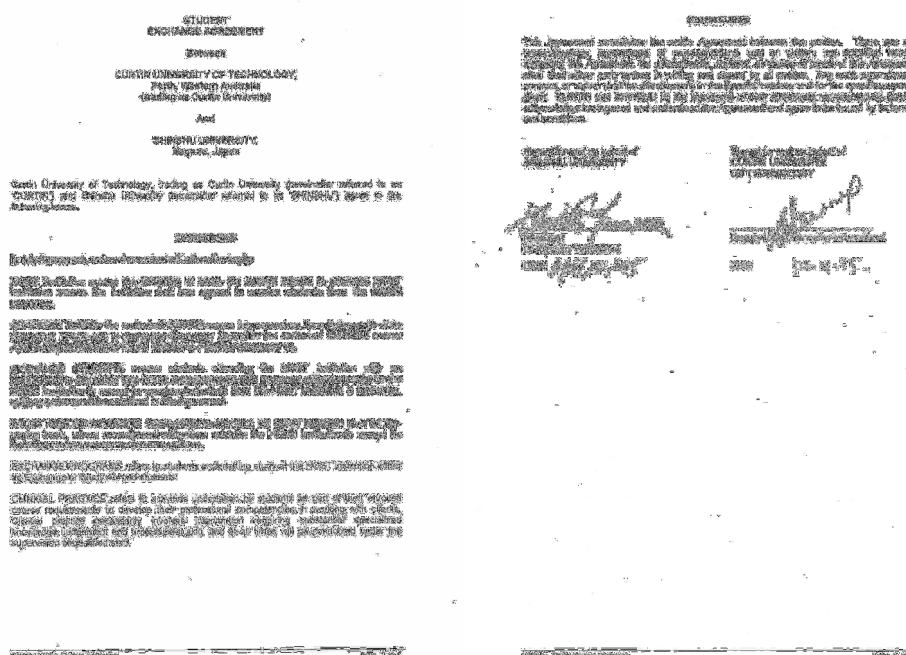
* 信大附属病院看護師2名を含む ** 大学院生2名を含む

- 9) カーティン関係者招聘：2007年1～2月、国際教育課程ディレクター パメラ・ロバーツ、2010年1月、Nursing school 講師アラン・トルク。2013年1月、Biomedical Sciences 学部 Dr マーティン。2015年1月、カスタマイズ・プログラム担当者 ジュディー・モイアー。

2. 学術交流協定および教員と学生の交流に関する協定書の更新

1999年4月に締結された学術交流協定および2000年8月に締結された学術交流協定に基づく学生の交流に関する協定書は、2004年4月に信州大学とカーティン工科大学の間で、「学術交流協定」および「学術交流協定に基づく教員と学生の交流に関する協定書」として更新され、2009年には信州大学国際交流センターを窓口とした大学間協定となり、夏期研修プログラムとカーティン教員招へいが医学部保健学科とカーティン大学英語センター（Curtin English Language Center, CELC）・健康科学部により企画・実施され、両校の交流は一層親密に深められることになった。また、本協定に基づき、信州大学はカーティン大学から短期留学生（学部）を受け入れている。

教員と学生の交流に関する協定書（2015.4 Curtin University of Technology）



3. シンガポールおよびネパール短期留学プログラムの発足と国際交流委員会へ名称変更

2014年には、シンガポールおよびネパールの夏期海外研修保健医療スタディツアーのプログラムが加わった。これに伴い、2014年4月より委員会名が、カーティンプログラム実施委員会から保健学科国際交流委員会に名称変更された。

シンガポール保健医療スタディツアーは、理学療法専攻（応用理学療法学）のGoh Ah Cheng 准教授がSingapore General Hospital : SGHでの講義や活動を継続していたことから交流があり、学生の研修を含めて協定を結んだ。2014年（1回）7名、2015年（2回）17名、2016年（3回）14名、2017年5名（4回）が当研修プログラムに参加した。

ネパール保健医療スタディツアーは、看護学専攻広域看護学領域の奥野教授（公衆衛生看護）がかねてより現地の NPO 活動を支援してきたこと、学生からの渡航訪問希望が継続していたことから、プログラムが発足した。2014 年（1 回）5 名が夏期海外研修プログラムに参加した。2015 年 4 月 25 日のカトマンズ付近を震源とするネパール地震の発生をうけ、予定されていた 2015 年のプログラムは中止とした。2016 年（2 回）には 2 名が当研修プログラムに参加した。

学生の交流に関する協定書（2013.Singapore Health Services PTE Ltd.）

**MEMORANDUM OF UNDERSTANDING
FOR THE DEVELOPMENT OF ACADEMIC COOPERATION**
Between
**SINGAPORE HEALTH SERVICES PTE LTD ("SINGHEALTH")
SINGAPORE**
And
**SCHOOL OF MEDICINE, SHINSHU UNIVERSITY
NAGANO, JAPAN**

In furtherance of their mutual interests in the field of education and research and as a contribution to increased international cooperation, SingHealth, through its Group Allied Health, and Shinshu University, through School of Medicine agreed that:

1. The parties will:
 - i) cooperate in the exchange of information relating to their activities in teaching and research in fields of mutual interests;
 - ii) promote appropriate joint research projects and joint courses of study, with particular emphasis on internationally funded projects;
 - iii) endeavour to encourage students and staff to spend periods of time in the host institution. The exchange of students will be dependent upon the execution of a formal Student Exchange Agreement mutually agreed between the parties in writing prior to commencement of this activity;
 - iv) conduct cultural projects, as mutually agreed in writing between the parties, prior to commencement of this activity;
 - v) conduct study tours, as mutually agreed in writing between the parties, prior to the commencement of this activity;
 - vi) provide Study Abroad opportunities at undergraduate and graduate level as mutually agreed in writing between the parties prior to the commencement of this activity.
 2. The aim of the Memorandum of Understanding shall be to achieve a broad balance in the respective contributions and benefits of the collaboration, and this shall be subject to periodic review by both parties.
 3. The coordinators from the parties will prepare an annual joint report on activities in the areas of cooperation under this Memorandum of Understanding.
 4. In the implementation of specific cooperative programs, a written agreement covering all relevant aspects including funding and the obligations to be undertaken by each party will be negotiated, mutually agreed and formalised in writing, prior to the commencement of the program.
- As such this Memorandum of Understanding does not of itself create any legal obligation of any kind on either party to undertake the collaboration described herein.
5. This Memorandum of Understanding will take effect from the date of its signing and shall be valid for a period of five years from that date unless sooner terminated, revoked or modified by mutual written agreement between the parties, and may be extended by mutual written agreement.
- Either party may terminate the Agreement at any time during the term by the provision of three months written notice to the other party.

- 6A.1 A Party in receipt of Confidential Information from the other Party shall not use or disclose the other Party's Confidential Information without that other Party's prior written consent other than (i) for the purposes of carrying out this Memorandum of Understanding, provided any disclosure is only to such of the receiving Party's personnel or to its related company and its personnel who need to know and who are made subject to the confidentiality requirements of this Memorandum of Understanding or (ii) as required by law.
- 6A.2 Confidential Information means (i) terms of this Memorandum of Understanding and (ii) all information (in whatever form) disclosed by one Party to the other, whether before or after the date of this Memorandum of Understanding but excludes information which (a) is or becomes public knowledge other than through a breach of this Memorandum of Understanding (b) the recipient can show to the discloser's reasonable satisfaction to have been in the recipient's lawful possession prior to disclosure or (c) the recipient can show to the discloser's reasonable satisfaction to have been lawfully received from a third party not obliged to keep that information confidential.
- 6A.3 Subject to Clause 6A.6, the Parties shall not make any public announcement in relation to this MCU without first obtaining the approval of the other Party.
- 6A.4 Subject to Clause 6A.6, each Party shall not use any name, logo, trade name, trademark, service mark or other symbol associated with the other Party without the prior written consent of the other Party.
- 6A.5 Each Party shall respect the intellectual property of the other Party.
- 6A.6 Notwithstanding anything to the contrary in this Clause 6A, Shinshu University shall be entitled to communicate the existence of this Memorandum of Understanding in its internal communication (including in its website and in-house publications).

IN WITNESS WHEREOF, the parties hereby affix their signatures on the date and place first above mentioned.

Signed by _____)
 Name: Prof. Dr. Yoshimitsu Fukushima)
 Designation: Dean, School of Medicine)
 duly authorised to sign for and on behalf of)
SCHOOL OF MEDICINE, SHINSHU UNIVERSITY)
 in the presence of:)
 Name: Prof. Masayoshi Ohira)
 Signature: Masayoshi Ohira)

Yoshimitsu Fukushima
 Signature
 Date: Aug 9, 2013

Signed by _____)
 Name: A/Prof Cedra Tan)
 Designation: Group Director, Allied Health)
 duly authorised to sign for and on behalf of)
SINGAPORE HEALTH SERVICES PTE LTD)
 in the presence of:)
 Name: Ms. Tan May Yan)
 Signature: Ms. Tan May Yan)

Cedra Tan
 Signature
 Date: Aug 20, 2013

Ⅲ. 信州大学医学部保健学科の国際交流プログラム概要

1. プログラムによる育成人材像および達成目標

1. 他国の人々と協同して活動ができるように英語コミュニケーション力を高め、国際社会に貢献できる人材を育成する。
2. 英語による学習から、異文化交流の意義と魅力を体感する。
3. 異文化での学習・生活体験を通じて、国際的視点から医療従事者としての態度を涵養する。
4. 卒前・卒後教育、臨床の機会を自ら国外にも求め、国際的に活躍できる医療従事者を育成する。
5. 海外への大学院留学や日本に留学した学生などと、英語を用いて共同研究ができる人材を育成する。

2. 国際交流プログラムの全体

1. 大学間学術交流協定に基づくオーストラリア・カーティン大学 (Curtin University) 夏期海外単位認定プログラム
カーティン大学や医療機関での学習および現地ホームステイを中心とする体験プログラム
2. 信州大学—ネパール連邦民主共和国夏期海外研修保健医療スタディーツアープログラム
ネパール、カトマンズ他の地域において NPO 活動と現地住民との関わりを中心とする体験プログラム
3. 信州大学—シンガポール共和国夏期海外研修保健医療スタディーツアープログラム
シンガポールの主に医療機関でのレクチャーおよび見学を中心とする体験プログラム

IV. 信州大学－Curtin University

大学間学術交流協定に基づく夏期海外単位認定プログラム



信州大学－Curtin



1. カーティン大学の概要

1. 設立

- 1) 1967年：The Western Australian Institute of Technology (WAIT) として創設。
- 2) 1987年：Curtin University of Technology (カーティン工科大学) となる。
- 3) 2010年：Curtin University (カーティン大学) となる。

*カーティン工科大学の名称は、オーストラリア首相を歴任したジョン・カーティン創設者に由来する。パースは日本でも古くから遠洋漁業の基地として知られている。広大なキャンパスを有機的に機能させるため、学内に国際教育担当部門を独立させ、情報ネットワークを整備し、国内外の教育研究機関と遠隔地教育・研究を推進している。1996年から、シンガポール、マレーシア、インドネシア、香港等の教育機関とインターネットを利用した学位取得課程を展開し、実績を上げている。大学院教育では、卓越した教育プログラムが評価され、非英語圏のみならずアメリカ、カナダ、ヨーロッパの留学生も相当数在学している。

2. 位置

- 1) 西オーストラリア州
- 2) メインキャンパスはパース (Perth：西オーストラリア州の州都。人口約 120 万) の郊外ベントレー (Bentley：中心部より 10 キロ南東へ位置、海岸まで車で 20 分) に立地し、他に Perth 中心部の大学院キャンパスとその他のキャンパス (海外を含む) を有する (Kalgoorlie, Margaret River, Northam, Perth, Shenton Park, Sydney; Malaysia, Singapore) .

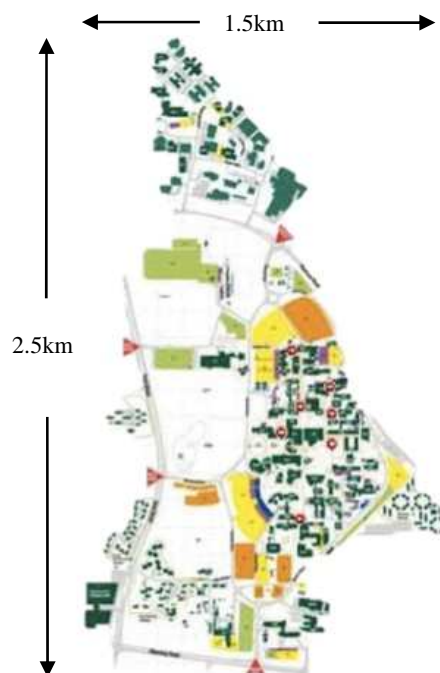
Address: Kent Street, Bentley, WA6102, Perth, Western Australia
TEL : 08-9266-9266, HP-address: <http://www.curtin.edu.au/>

3. 学部等

- 1) 学部：経営学部、健康科学部、人文学部、理工学部、先住民研究
- 2) 大学院：経営学、健康科学、人文科学、理工学

4. 学生数および教職員数 (2015 年現在)

- 1) 学生数：約 6 万人
(うち留学生約 16,400 人)
- 2) 教職員数：約 4 千人 (うち教員約 1,850 人)



2. 平成 29 年度夏期海外単位認定プログラム

1. はじめに

信州大学-カーティン大学間学術交流協定にもとづき、平成 29 年度夏期海外単位認定プログラムが 8 月 4 日から 8 月 20 日の約 2 週間にわたり、カーティン大学およびパース市内外の関連施設・病院で実施された。本年のプログラムには 20 名の信州大学医学部保健学科学生が参加した。

カーティン大学での単位認定プログラムの実施にあたり、4 月から 7 月にかけて、単位認定プログラム全般のオリエンテーション(研修内容や現地での生活の説明、研修関係資料の配布、航空券や海外旅行傷害保険の購入を含む各種手続き、チーム・ビルディングのためのワークショップ、英会話等)が計 8 回行われた。

2. 夏期海外単位認定プログラム

- 1) 目的：他大学・文化での学習・生活体験を通じ、国際的視点から医療従事者としての態度を涵養する。
- 2) 本学における単位認定：国際医療協力論の単位として認定する。単位認定には、信州大学、カーティン大学における全てのプログラムに参加することとし、研修レポートの提出が必須である。

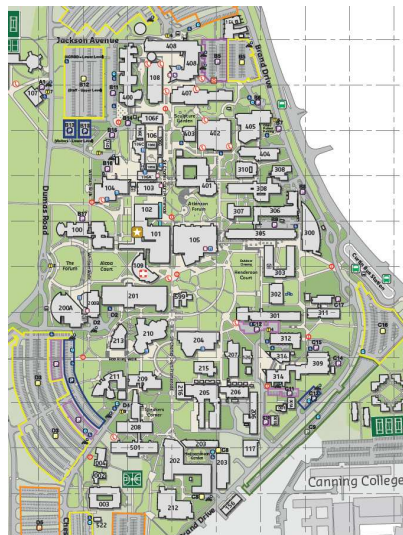
3. 研修期間

平成 29 年 8 月 4 日（金）～8 月 20 日（日）の 17 日間

4. 研修場所

- 1) 研修キャンパス：カーティン大学ベントレーキャンパス
- 2) 見学施設

Curtin University Simulation Lab
Fiona Stanley Hospital
Hollywood Hospital
Independent Living Centre (ILC) / The Niche
Regent's Garden Aged Care Facility
Western Australian Institute of Sport (WAIS)



5. 研修プログラムの内容

<第1週>

- オリエンテーション
- キャンパスツアー
- 英語・英会話の授業（医療英語やオーストラリア文化の学習を含む）
- カーティン大学日本語クラブ（Curtin Japanese Club）の学生との交流
- 施設見学（全専攻）：ILC / The Niche
- 社会科見学：スワンバレー、ワイルドライフパーク、チョコレート工場、ワイナリー

<第2週>

- ELICOS（留学生向けの英語の授業：他国からの留学生と一緒に受講）
- 英語・英会話の授業
- Curtin Japanese Club の学生との交流
- 施設見学：（全専攻）カーティン大学シミュレーション実験室、WAIS
（看護・検査）Regent's Garden Aged Care Facility、Hollywood Hospital
（PT・OT）Fiona Stanley Hospital
- 修了式
- 観光：ロットネスト島

6. 参加人数

看護学専攻：	7名（1年生4名、3年生3名）
検査技術科学専攻：	1名（1年生1名）
理学療法学専攻：	8名（1年生5名、2年生3名）
作業療法学専攻：	4名（2年生3名、3年生1名）

合 計	20名
-----	-----

7. 研修サポート・危機管理

信州大学医学部保健学科・国際交流委員会

杉山暢宏教授（委員長）、伊澤淳教授（副委員長）、山崎浩司准教授、山崎明美講師、
奥村伸生教授、小穴こず枝准教授、青木薫准教授、Goh Ah-Cheng 准教授、佐賀里昭講師、
川船圭介事務員（学務第2係）

8. 研修費用

1) 研修費用 【内訳】

・ 日本国内交通費	20,000 円
・ 渡航費用	173,000 円
・ 宿泊費用（ホームステイ）	86,000 円
・ 保険料・ビザ申請料	15,000 円
・ 携帯電話レンタル料	4,000 円
・ 授業料等プログラム費用	114,000 円
計	412,000 円

2) 研修支援

本研修は、2017 年度の信州大学知の森基金（グローバル人材育成のための学生への短期海外活動支援）に応募し、採択された。全参加学生に 6 万円の奨学金が支給された。

9. リスク管理体制

1) 海外研修中の支援システム／サービスへの加入

信州大学が正会員となっている特定非営利活動法人海外留学生安全対策協議会（The Japanese Council for the Safety of Overseas Studies: JCSOS）の JCSOS 緊急事故支援システム（J-Basic）に加入し、研修中の不慮の事故に対するリスク管理体制を整えた。また、学生の留学生活中に発生する様々な問題を解決するためのサポートを含んだ JCSOS トータルアシスタンスサービス（J-TAS）に、参加学生全員が加入した。

2) 外務省海外旅行登録「たびレジ」への登録

参加学生全員が、在外公館などから緊急時情報提供を受けられる海外旅行登録システム「たびレジ」に登録した。

3) 海外旅行傷害保険への加入

参加学生全員が、同じ会社の海外旅行傷害保険に加入した。

4) 危機管理マニュアルの作成・配布

他大学や信州大学グローバル教育推進センターの危機管理マニュアルを参考に、保健学科独自の危機管理マニュアルを作成した。マニュアルには、緊急時の連絡先および連絡の方法が明記されている。参加学生には、緊急連絡先と方法のみ示してある簡易版を配布した。

5) 現地の日本語対応可能人材・組織の周知

カーティン大学およびパース市内で、日本語対応可能な人物および組織などの連絡先一覧を作成し、参加学生に周知した。

6) 相互支援の意識醸成・体制構築

全参加者 20 名を 4 班（各 5 名）に分け、各班にリーダーとサブリーダーを設け、問題発生時にはリーダーを中心に班員で協力して対応することを確認した。また、事前オリエンテーションにおいて、チーム・ビルディングの研修も行い、相互支援意識の醸成を図った。

7) 日報の義務化

各班のサブリーダーに、班員全員の無事を国際交流委員の教職員に、毎日メールで報告することを義務づけた。すべての班のサブリーダーは、おおむねこの義務を遂行できた。

3. 研修プログラムの詳細



2017 SHINSHU UNIVERSITY CUSTOMISED PROGRAM

Week 1

Time	Saturday August 5	Monday August 7	Tuesday August 8	Wednesday August 9	Thursday August 10	Friday August 11	Saturday August 12	
AM	<p><i>Arrive Perth</i></p> <p>5/8(Sat)</p> <p>12:50</p> <p><i>SQ213</i></p> <p><i>Bus from airport to Curtin;</i></p> <p>2.00 to 3.30</p> <p><i>Homestay orientation</i></p>	<p>10.00 – 11.00</p> <p>216.117</p> <p><i>Orientation</i></p> <p><i>Campus tour</i></p> <p><i>Bookshop – Smart rider</i></p> <p>11.00 – 12.00</p> <p>211.227</p> <p><i>OASIS login</i></p> <p><i>Transperth</i></p>	<p>10.00 – 12.00</p> <p>402.302</p> <p>English Class:</p> <p>Introduction to Australian Culture</p> <p>June</p>	<p>10.00 – 12.00</p> <p>501.103</p> <p>English Class:</p> <p>communication skills</p> <p>June</p>	<p>10.00 – 12.00</p> <p>408.1505</p> <p>Class: English for health professionals;</p> <p>preparation for excursion</p> <p>June</p>	<p><i>Excursion:</i></p> <p>8.45: <i>Bus depart Curtin</i></p> <p><i>Swan Valley:</i></p> <p>9.45 – 12.30:</p> <p><i>Caversham Wildlife Park:</i></p> <p>10 – 10.45</p> <p><i>Molly’s Farm show;</i></p> <p>10.45 – 12.30:</p>	<p><i>Excursion to Rottnest Island</i></p> <p>8.00</p> <p>Barrack Street Jetty</p> <p>6.30 <i>Ferry arrives</i></p> <p>Barrack Street Jetty</p>	
Lunch	<p><i>and meet host families</i></p> <p>216.117</p>						<p>10.45 – 12.30:</p> <p><i>Free time including lunch;</i></p> <p>1 – 1.30:</p> <p><i>Margaret River chocolate factory;</i></p> <p>2pm:</p> <p><i>Sandalford Winery</i></p> <p>3pm: <i>bus depart Sandalford</i></p>	
PM		<p>1.00 – 3.00</p> <p>Orientation</p> <p>program visit:</p> <p><i>local shopping centre and supermarkets</i></p>	<p>1.00 – 3.00</p> <p>407.213</p> <p>Class: English:</p> <p>Communication skills</p> <p>June</p>	<p>12.00 – 2.00</p> <p>216.206</p> <p><i>Language Exchange with Curtin</i></p> <p><i>Japanese Club (CJC) members</i></p>	<p>Field trip</p> <p>Depart Curtin</p> <p>12.45</p> <p>All students</p> <p>1.30 – 3.00</p> <p><i>The Niche (ILC)</i></p> <p>Arrive Curtin</p> <p>3.45</p> <p>June</p>			

**Week 2**

Time	Monday August 14	Tuesday August 15	Wednesday August 16	Thursday August 17	Friday August 18	Saturday August 19
	<p>Field trip Depart Curtin 8.45</p> <p>Nursing and Biomed 9.30 to 10.30 Regents aged care facility Arrive Curtin 11.15</p> <p>June</p> <p>2.00 – 4.00 PT and OT ELICOS English class</p>	<p>Field trip Depart Curtin 2.15</p> <p>PT and OT Fiona Stanley Hospital 3.00 – 4.30 Arrive Curtin 5.15</p> <p>Peter</p> <p>2.00 – 4.00 Nursing – Biomed ELICOS English class</p>	<p>12.00 to 1.00 405.310 All students Curtin university simulation lab</p> <p>Field Trip Depart Curtin 1.15</p> <p>All Students 2.00 - 3.30 WAIS Arrive Curtin 4.15</p> <p>Peter</p>	<p>9.00 to 10.30 407.404 English class – debrief and evaluations Graduation</p> <p>10.45 to 12.00 – Graduation Lunch</p> <p>Field Trip Depart Curtin 12.15</p> <p>Nursing and Biomed 1.00 – 4.00 Hollywood Hospital Arrive Curtin 4.45</p> <p>Peter</p>	<p>Excursion to Rottnest Island 8.00 Barrack Street Jetty</p> <p>6.30 Ferry arrives Barrack Street Jetty</p>	<p>Depart Perth Bus from Curtin to Airport</p>

4. 学生アンケート【20名】

専攻/参加者数	1年	2年	3年
看護学専攻	4		3
検査技術科学専攻	1		
理学療法学専攻	6	2	
作業療法学専攻		3	1

I 出発前の準備について

1. 研修プログラムへの参加動機

- ・実際に英語圏に行ってネイティブの人と会話がたくさんできるホームステイというプログラムがあったから。(10)
- ・元々、海外に興味があったから。(3)
- ・外国の医療システムや文化に興味があったから。(3)
- ・海外のPTについて知りたかった。オーストラリアでは日本よりずっとPTという職業が確立されており、日本では学べないことが学べると思ったから。(3)
- ・英語力を伸ばしたいと考えたため。(2)
- ・日本とオーストラリアのPTの違いを知りたかった。(2)
- ・英語が好きで自分の英語力を海外で試してみたいと思ったから。(2)
- ・海外での経験をしてみたいと思っていたから。
- ・海外で勉強することに興味があったから。
- ・将来海外で働くのもいいなと少し思っているから。
- ・以前から海外研修に参加したいと思っていたため。
- ・海外へ留学したいと思っており、良い機会だと思ったため。
- ・医療に関わらず、元々海外・異文化には興味があった。

2. JCSOS または短期海外活動支援の補助金以外の費用の捻出方法

- 1) 家族が全額負担 2) 自己資金のみ 3) 自己資金と家族の補助 4) その他
- 1 1人 2人 7人 0人

3. 渡航前の自己学習

1) 自己学習をした人 【17人】

学習内容

- ・TEDを見た。(4人)
- ・英会話(4人)
- ・週に3-5回リスニングをしていた。(2人)
- ・オーストラリア医療システムについて調べた。(2人)
- ・英会話の練習を行ったり、英語でドラマを見たりした。(2人)
- ・YouTube「バイリンガール」の視聴、もらった資料に目を通す。(2人)
- ・PTのテスト内容の復習。
- ・メディケア
- ・TOEICのテキストを使ってリスニングの勉強をした。
- ・オーストラリアの文化、方言

- ・英語の朗読 CD を聞いた。
- ・大学受験の際に使用した単語帳の復習

2) 何もしなかった人 【3人】

事前学習が必要だと思った内容

- ・日本の病院についてもっと学習しておくべきだった
- ・英語
- ・理学療法についての知識を身につけておくべきだった

4. 研修プログラムの説明会の時期

適切 YES 20人
NO 0人

5. 参加申し込み締め切りの時期

適切 YES 19人
NO 1人

6. オリエンテーションについて

1) 時期

適切 YES 20人
NO 0人

2) オリエンテーションの内容

適切 YES 13人
NO 7人

- ・経験者の話を直接聞き、質問して不安の解消材料にしたかった。
- ・英会話をもう少しやってほしかった。
- ・大学でのカリキュラムの内容について知りたかった。
- ・オーストラリアでの詳細な行動予定を知りたかった。
- ・最低限必要な英語能力について質問したかった。

II ホームステイについて

1. ホームステイの満足度

	非常に不満	やや不満	どちらとも いえない	やや満足	非常に 満足
①費用について		5	10	3	2
②交通の便について	3	5	1	3	8
③食事について			3	6	11
④ホストファミリーにつ いて			4	4	12
⑤全体の満足度について		1	1	10	8

※全体としての評価が“非常に不満”または“やや不満”、その具体的内容

- ・もう少し価格が安い方がよかった。
- ・家から出かけるときは基本的にバスの利用が必要だったが夜になるにつれて本数が1時間に1本になったりして困った。
- ・バスの交通費が0円の学生もいれば2週間で12000円以上かかった学生もいた。少し不公平かと思ったが仕方がないことだとも思った。
- ・ホームステイの家族と性格が合わなかった。国によって価値観や考え方が違うのは理解できているつもりだったが、それでも自分はホストファミリーの生活になじむことができなかった。
- ・ホームステイ先からカーティン大学までの費用が、人それぞれでホームステイ先の場所によって差が大きすぎる。
- ・ホストファミリーが当日変更された。
- ・Wi-Fiがなかったため、家族や研修生との連絡に苦労した。

2. ホームステイを経験してよかったこと

- ・日常英会話を経験できたこと、日本との文化や考え方の違い、価値観に少し触れることができたこと（4）。
- ・英語を使って自分でなんとかしなければならなかったので、英語を積極的に使えたこと。
- ・オーストラリアの生活様式を体験できたこと。（3）
- ・子供が多い家庭だったのでリビングや庭といった、人のいるところにいることが多く、英語を使わなければいけない場面が多かった。その分、聞き取りもできるようになったし、何よりコミュニケーションをとることでたくさんの経験ができたと思う。（3）
- ・英語のみで生活する環境を体験できたこと。文化を直接見て触れて学べたこと。いろいろな所へ連れて行ってもらえたこと。（2）
- ・普段の自分の生活を見直すきっかけになった。自分の力で行動できることが増えて自信につながった。
- ・現地の家庭や生活を肌で感じることもできたこと。（2）
- ・ホストファミリーのマザーがPTの方だったため、PTについての本や、アトラスなどの本を見せてもらうことができ、また、マザー（Physiotherapy）が運営するクリニックを見学でき、実際にPTが日本と違いオーストラリアでどのように仕事をしているかを知ることができた。他にも、1人で言葉が通じない場所で違う家族と生活するという体験をしたことで、気持ち的に強くなれたと思う。
- ・ホストファミリーとたくさん会話をするのができ、それが一番英語の勉強になった。オーストラリアの文化だけでなく、ホストマザーの出身であるフィリピンの文化についても学ぶことができた。ホストマザーの知人と食事をする機会があり、そこでオーストラリアの歴史などについて教わることができた。
- ・学校で習う形式的な英語ではなく、日常で使うフランクな英語をたくさん学べた。ホームステイ先に他の国の留学生もいたため、様々な文化を知ることができた。
- ・日本語が一切通じないため、会話をするために英語を必死で話せるようになったこと。自分から話さなければ何も会話ができないが、自分から勇気を出して一言話しかければいくらかでも答えてくれたため、一歩踏み出す勇気を学んだこと。
- ・ホームステイ先での食事に野菜がたくさん出たので、健康的でおいしい食事を毎日食べることができたからよかった。
- ・英語しか話せない環境なので自然と自分が伝えたいことをどのように伝えれば良いか考えるようになったこと。

3. ホームステイで困ったこと

- ・もっと英会話ができればスムーズに会話ができると感じた。(5)
- ・ファミリーが家にいないときはとても暇であったこと。(3)
- ・食事に野菜が本当に出てこないのも、健康的に大丈夫かなと心配になった。(2)
- ・ホストマザーと子供の会話は聞き取れたが、ホストファーザーの英語が最期までどうしても聞き取ることができなかった。ホストファミリーの寝る時間がとても早かったのも夜に物音を立てないようにするのに気を遣った。
- ・お風呂の時間が短かった。シャワーを思う存分使うことができなかったこと。
- ・Wi-Fiが使えなかったため、友人と夜、連絡が取れずに困った。
- ・ホストファミリーの人は、根気よく聞いてくれて困ることもあったけど嬉しいとも感じた。
- ・家族のルールに従うことが、窮屈に感じることもあった。例えば、ホストファミリーが気を遣ってくれて2週間ぎっしり予定を詰めてくれていたのは嬉しかったが、とにかく疲れてしまい、体調不良になった。自分の時間がほとんど与えられなかった。
- ・ホストファミリーは夜寝るのも朝起きるのも早くて、自分とは生活リズムが違ったこと。
- ・コミュニケーションが上手くとれないことで気を遣わせてしまっているなど感じる時があった。
- ・昼食が足りないことがあった。部屋で歯磨きをしていたら怒られたので、最初にルールを確認しておけばよかった。
- ・性格の不一致。ファミリールールに順応すること。
- ・ホストファミリーの子供とコミュニケーションがうまくとれなかった。
- ・他の留学生がいることを知らなかったため、はじめは戸惑った。
- ・ドライヤーがなかった。
- ・おばあさんの独り暮らしの家で他の留学生もおらずホストマザーが寝た後(20時頃)からの時間に時間を持て余した。持参したドライヤーが使用できず、ホストマザー宅にもなく髪を乾かせなかった。

4. ホームステイに対する要望

- ・少しバス停に近い家が交通の便がいいと思う。(2)
- ・他の家も経験してみたかった。
- ・大学までの交通費が高いなと思う。(個人差がありすぎる)
- ・ホームステイ先にいる人数を性格に知りたかった。
- ・自分の時間も考えてほしかった。

III J-TAS の利用状況について

海外留学生安全対策協議会 (JCSOS) が提供しているサポート (J-TAS) について

1. 日常生活面について相談できる「海外危機管理サポートデスク」及び健康面について相談できる「海外健康相談サービス」について、利用の有無。

利用した	1人
利用していない	18人
無回答	1人

2. これらのサービスが利用出来る状況があつて、良かったと思いますか？

利用出来なくても問題なかったと思う	0人
どちらともいえない	7人
利用出来る状況があつて良かったと思う	13人

IV レンタル携帯電話の利用状況について（カーティン大学プログラム参加者のみ回答）

1. パースでレンタルした携帯の使用状況について

まったく使用しなかった	0人
あまり使用しなかった	3人
良く使用した	10人
頻繁に使用した	7人

※頻繁に使用した際、どのような用件で使用したか。

- ・ホストファミリーとの連絡手段（13）
- ・Wi-Fiがなかった家の友達との連絡手段（5）
- ・次の日の集合場所や行動についての確認（6）
- ・最初の頃は不安があつたので夜に友人と話した（2）
- ・家族との連絡（1）
- ・学外との友人との連絡

2. レンタル携帯について、改善点。

- ・バッテリーが切れるのが早すぎて困った。（3）
- ・ポケットWi-Fiがあればどこでも自分のスマートフォンが使える、レンタル携帯は不要ではないかと思った。
- ・使用方法が良くわからなかった。（ロックの仕方がわからなくて鞆の中でついたりした）

V 研修コースについて

1. 英語及び医療英語の授業について（カーティン大学プログラム参加者のみ回答）

	非常に不満	やや不満	どちらともいえない	やや満足	非常に満足
①英語の授業を設けたことについて			4	6	10
②始業時間、授業時間について		1	2	9	8
③授業内容について		2	4	5	9
④授業のレベルについて		1	5	7	7
⑤全体としての満足度		2	2	6	10

※全体としての評価が“非常に不満”または“やや不満”、その具体的内容

- ・日本人の学生だけで受けたので日本での授業とあまり変わらなかった。もう少し英語を話す機会の多い授業が良かった。
- ・英語の授業はよかったが、もう少しオーストラリアの医療システムについて学びたかった。

2. 英語以外の授業についての満足度

	非常に 不満	やや 不満	どちらとも いえない	やや 満足	非常に 満足
①始業時間、授業の時間 について		1	3	8	8
②授業の内容について	1	1	1	6	11
③授業のレベルについて		1	4	6	9
④全体としての満足度	1	1		9	9

※全体としての評価が“非常に不満”または“やや不満”、その具体的内容

- ・このプログラムに参加した日本人のみの授業は日本でもできるからわざわざオーストラリアに行ってまでやる必要はないと感じた。
- ・PT・OTの授業に見学などの時間がなく、当初予定されていた回数より少なく、1回のみ専門授業だったため、もう少しPTについての授業があったらいいなと思った。
- ・英語以外の授業をした覚えがない。
- ・今年はカーティン大学のPTの授業見学ができなかったため。
- ・遠出するには時間が足りない。

3. 施設などの見学（体験含む）について

	非常に 不満	やや 不満	どちらとも いえない	やや 満足	非常に 満足
①見学時間について		1	2	9	8
②見学内容について		1		9	10
③見学説明のレベルに ついて		1	1	10	8
④見学施設について		1		8	11
⑤全体としての満足度		1		8	11

※全体としての満足度が“やや不満”または“非常に不満”だった内容

- ・病院見学が私立病院だったので公立病院も行って見たかった。
- ・病院やスポーツの施設見学は勉強になって良かったが、カーティン大学の授業見学ができなかったのが非常に残念だった。
- ・もっと長い時間見学をしたかった。

一番印象に残った見学先とその理由

*WAIS（4人）

- ・実際に働きたいと思ったから。日本にもこのような施設ができればいいと思った。
- ・自分がスポーツPTに興味があり、それについて学ぶ施設であったため。
- ・自分が働きたい分野に一番近かったため。

*5つ星の老人福祉施設（4人）

- ・日本とはまるで違う設備に驚いた。日本も取り入れたらいいと思えるような設備がいくつもあった。
- ・オーストラリアの年金や介護に対する国の支援について学べたから。

- ・すべてが豪華で、高級ホテルのような印象だったため。
- ・滅多に行けないような豪華な施設であったため。

*Fiona Stanley Hospital (3人)

- ・西オーストラリアの主要な病院で、施設が豊富にあり医療現場を見学できたから。
- ・スタッフの教育施設があり、その内容・施設ともにとっても充実していることに驚いた。例えば、呼吸、心拍、瞬き、会話を行う訓練用ドールによる救急の訓練や、薬や精神病によって暴力化した人々に対抗するための体術を学ぶ教室などは初めて見るものだったので驚いた。建物自体にも患者の精神面への配慮が多く施されていて勉強になった。

*hollywood hospital (3人)

- ・実際に働いている雰囲気なども知れて良かったから。

*ILC (3人)

- ・今まで見たこともないような様々な自助具を見れたから。

*カーティン大学内の模擬実習室 (2人)

- ・別室から様態を自由に変えられる人形が置いてあり、いろいろな状況に合わせた対応ができるため、素晴らしいシステムだと思った。信大にもほしいと思った。

*リージェントガーデン

- ・今まであんな施設を見たことがなかったから。

*Niche

- ・日常生活を過ごすことに困難を感じている方に、その人に合ったものを提供しており、初めて見る物もあり、とても良い見学だと感じたため。

4. (1) 英語を使つての会話について

まったく積極的に行えなかった	あまり積極的に行えなかった	どちらともいえない	やや積極的に行った	とても積極的に行った
		5	10	5

(2) 今後、英語力アップのため、TOEIC や IELTS などの英語試験を受けようと思いませんか

まったく思わない	あまりそうは思わない	どちらともいえない	ややそう思う	とてもそう思う
2	4	3	7	4

5. コースを通して、よかったこと

- ・オーストラリアの生活や異国の文化について知れたこと。(6人)
- ・英語の勉強になった。(4人)
- ・ホームステイという貴重な経験ができたこと。(2人)
- ・オーストラリアの友達ができ、いろいろな人と情報交換ができたこと
- ・困った時にいろんな人に助けてもらえたので、自分も日本で困っている人がいたら積極的

に助けたいと思えたこと。

- たくさんの経験をする事ができた。普通の生活をはじめ、遠足など新しいものをみたり、体験したりする事ができ、また来たいと思えた。また一方で、日本の良さをあらためて知ることもできたと思う。
- これからの大学生活へのいい刺激になった。
- 学生のみで現地で行動できて、結団する力が身についた。
- 自分の将来のビジョンが少し定まり、医療者としてのモチベーションが高まった。
- 英語を話せるようになりたいと心から思った。
- 授業はとても充実した内容で将来役に立つような内容ばかりだった。カーティン大学で今回の研修のサポートをしてくれた教員方は授業面でも生活面でもとても親身になってくれて、不安なく生活する事ができた。適度に自由時間が確保されており自分のやりたいことを心置きなくできたことも良かったと思う。何より病院見学で実際の現場を見学させてもらえたことはとても勉強になった。
- 自分の世界観が広がった。
- 少しだがオーストラリアの PT について学べたこと。
- 研修の長さもちょうどよかった。
- 観光もでき、現地の人とコミュニケーションがとれたこと。
- 英語の授業があったり、文化やホームステイについての授業もあったりしたので安心できた。施設見学では、引率の先生がわかりやすい英語に直して説明して下さったのでその点もよかった。
- カーティンジャパニーズクラブの人と仲良くなれていろいろなところに連れて行ってもらえてとても楽しかった。

6. コースを通して困ったこと

- 自分の言いたいことを英語で表現できなかったこと。(6人)
- 施設見学では説明されたこと全部がわかったわけではなかったこと。
- ホームステイの環境に慣れるまでに時間がかかった
- みんなのホームステイ先が離れていたのもう少し近かったら安心できた。
- 例年行っているという PT の授業への参加ができなかったことが残念だった。現場の見学もためになったが、せつかくの海外研修なので教育の現場にも参加したかったと思う。シュミレーションラボの見学の時間が少なかったためか、あまりじっくり見る事ができなかったのもう少し時間に余裕があったら良かったと思った。
- ホストファミリーとあまりうまくいってなかった。ファミリールールや習慣に合わせる事が難しかった。
- 後半の自由時間が午前中に固まっていたのでできる事がなく暇だった。
- 大学への交通費が人によって異なっており、差がある人は1万円くらいあった。
- 家の外へでると Wi-Fi がつながらなくなるので、バスの乗り換えや、道など迷うことがよくあり、学校以外の観光などでは不安が強かった。
- バスが次に停まる場所を言わないため自分でボタンを押す場所を覚えておく必要があった。
- 航空機の座席をメールで確保することを知らず、ばらばらの席になってしまった。一番前の席で緊急時対応のために CA の説明を完全に理解する必要があったが、行えないため、席を変更するなどの対応を行う際に時間がかかった。

7. コースについての要望

- ・交通費に差があったため、なるべく公平になるように補助を出すなどの対策をしてほしい
(6)
- ・現地の学生との交流時間を増やしてほしい。(5)
- ・もう少し詳しく医療システムについて学びたかった。
- ・もう少し補助金が欲しい
- ・今回、検査科は一人ということもあるが、できれば検査の見学もあればいいと思った。
- ・もう少し自由時間がほしい
- ・PTの授業見学など、専門的な授業が一つだったため、もう少しあるとうれしい。
- ・英語の授業が少なかったように感じたのでもう少し増やしてほしい。
- ・医療系の見学先を増やしてほしい。
- ・授業見学をしたい。
- ・自由時間を午後にしてほしい。

8. 研修全体に対する評価

	大変悪かった	悪かった	どちらともいえない	よかった	大変よかった
①実施時期について		1	7	6	6
②期間について		2	4	5	9
③コースの構成について		2	2	10	6
④研修先のスタッフについて				5	15
⑤信州大学の教官の対応			3	8	9
⑥全体としての評価			1	11	8

※全体としての評価が“悪かった”または“大変悪かった”、その具体的内容

- ・現地の学生とともに授業を受けたかった。(2人)
- ・慣れてきた頃に帰国したためもう少し長く滞在したかった。

9. 今回の経験の意味 また、今後の学習・進路などへの影響

- ・海外の生活について知ることができたこと、オーストラリアの医療について知れたことは自分にとって大変意味のあることでした。海外で勉強したい・働きたいという思いはさらに強くなったし、英語やその他の言語を習得したいとも思うようになった。特に英語は自分の言いたいことが性格に表現できるくらいまで流暢に話せるようになりたいと感じたので、大学生活の中での空き時間を使って勉強していきたくて思いました。
- ・英語のリスニング力をもっと高めないといけないと思った。看護の勉強はもちろん英語の授業も英語力アップのため頑張っていきたいと思う。
- ・様々な国の医療について知っていきたいと思った。
- ・医療の道に進んだ今も今回の経験を通じて国際的に働くことができたらいいなと感じた。まだまだ卒業後のことは模索中だが、広い視野で物事を考えられる様になりたいと思う。
- ・日本の狭さを痛感した。看護以外のいろいろな分野にも興味を持つようになった。特に多言語や多文化について学びたいと思うようになった。また、自分の考え方の幅を広げられたのではないと思う。海外で学ぶことにも興味を持った。
- ・今回のホームステイなどの経験を通して、はっきり意思表示ができるようになった気がする。また、英語を読むこととコミュニケーションをとるための英語は違うことがわかり、

英語の勉強を机上だけで終わらず、実際に使えるようにしたいと思った。

- 英語に対する壁が低くなったと思う。積極的に英語とふれあっていきたい。また、普段の生活を見直し、節約を心掛けたい。
- ホームステイをしながら、現地の大学や医療を学べたことだけでなく、参加した信大生20人全員で協力しながら過ごした2週間はとても貴重で価値あるものとなった。海外の医療や勉強、文化に触れ、視野が広がったため、物事を広く捉え考える力を養うことができたと思う。
- 今回、様々な価値観に触れて、物事を多方面から考えるということを知ったとともに新しい自分を発見できたように思う。自分より英語ができる人が多くいたし、母国語以外に多くの言語を習得している人もいたので、私も英語が話せるようになりたいと心から思うきっかけになった。また、海外の医療に少し触れることでこれからのモチベーションが上がった。
- オーストラリアでの多様な文化に触れることができたことにより、寛容な態度を持つことができるようになった。今後の学習には何事にも積極的に取り組み、様々な視点から考えることを意識するようになると思う。
- 自分の英語力のなさを強く実感することができた。これから TOEIC を受けて英語力を向上していきたいと思う。
- 英語を聞き取ったり、話せるようになりたいと思った。また、海外の、PT が発展している国を実際に見学できたため、今後 PT になりたいと思っている自分に役立てればいいなと思った。
- 初めての海外であったが、無事に全日程を終えられたことが自身となった。しかし、ただ過ごすだけでなく、積極的に会話をするように努めたり、苦手なことにもチャレンジしたりできたことに大きな意味があったと思う。いつもの日常でないからこそいろいろなことにチャレンジしてみないともったいないという心持ちで頑張れた。これはこれからの日常で頑張る自信に変えていけると思う。
夏休みというだらけがちな時期に病院見学をして臨床に触れることで、勉強のモチベーションを保つことができている。残り期間も気を抜かず勉強をし、後期の実習につなげていけると思う。
- 自分の英語力が貧相であることに気がついた。現地の学生と自分を比べて、自分はもっと自立しなければならないと感じた。また、ホームステイを通して、様々な家庭があることを知った。
- 自分の英語のつたなさを再認識することができたので、これからの英語学習方法を考えていきたいと思った。
- 現地の学生と交流することで多くの刺激を受け、自分は将来どのような仕事をしたいのかなどを考えるきっかけとなった。
- 日本とオーストラリアの医療の違いを知ることができた。日本にいれば何も思わなかったことが、オーストラリアに行ったことにより日本に対しても興味がわいた。
- 常に英語を話さなければならない環境にいたので必然的に英語力がアップしたと感じた。これから日本も海外の方が多くやってくるようになると思うのでその時に何か役に立てるぐらい英語が話せるようになりたいと思ったので少しずつ英語を勉強しようと思う。
- 患者に提供する施設用具などで、日本にないもので海外に良いものがあるのではないかなど、患者がより良い生活ができるように考える案として、海外が出てくるのではないかと感じた。

- ・障害があっても工夫次第でその人らしい生活を送れることを身をもって知ることができた。OTとしてその手助けができるよう一層勉学に励みたいと感じた。
- ・2週間という短い間であったが様々な場所を見学し、多くの人とコミュニケーションをとることができた。日本で普通に暮らしてはできない経験がたくさんできた。相手と心を通じ合わせることの難しさと楽しさを肌で感じる事ができた。これからはどんな人とも今回のように気概を持って交流していこうと思う。

10. 今後の留学生受け入れプログラムに対する興味について

是非参加したい	興味がある	あまり興味がない
5	8	7

5. 学生レポート

今回の研修は2週間という短い期間ではあったが、その中で様々な施設を見学し、たくさんの人と出会うことができ、非常に貴重な経験となった。1年生から3年生まで参加したプログラムであったため、特に1年生は先輩に質問したりしながら、新たな医療知識をつけることができた実りのある物となった。

1. 施設見学

<Hollywood Private Hospital>

この病院は「People Caring for People」がモットーで、「Point of difference」一人ひとりの価値観を尊重し、個別性のある看護を目標としていた。病室は広々とした作りをしており、シャワーやトイレもついているというプライバシーの考慮されたつくりをしていた。ボランティアとして働いている人も多く、病院では、様々な職種の人が協力し合ってよりよい医療を提供していく精神が大事だと思った。我々が施設内を見学していると、通りすがりの看護師さんなどは全員、笑顔で挨拶をされていた。笑顔で挨拶は、簡単なことで基本的なことだがそのおかげで暖かい雰囲気になっていたことは明らかだった。

<Regents Garden Aged Care Facility>

日本でいう老人ホームのような施設であるリージェントガーデンという施設では、日本人スタッフの方がいらっしやったため、日本語でわかりやすく説明していただくことができた。リージェントガーデンは5つ星の評価を得ており、高い質のサービスが提供されている。建物の入口にはセキュリティが施されておりコード番号を知っている人しか入ることができないようになっている。さらに入口にはセンサーがついており、入所者の手にはリストバンドが付けられている。これらはすべて認知症などで徘徊してしまうひとが建物の外に出してしまうのを防止するためであるようだ。以前は徘徊する恐れのある人々は一つのセクションに集められてそこのドアは完全にロックされて徘徊しないようにされていたが、それだと自由がないと判断されて今のようなスタイルになったようだ。また、一つひとつの部屋が家のように設計されていて廊下には植物や街灯



が設置されており、施設ではなくそれぞれの家にいるような感覚でくつろいで過ごしてほしいという施設のスタッフの意向があるそうだ。

<WAIS>

WAIS は、2 年前に設立されたスポーツ選手の育成やケアを主に行っている施設である。選手が本番で疲労した中でも高いパフォーマンスができるように、気圧や気温を自在に変化させることの出来る部屋や疲れを残さないための 3 つの温度のプールなど施設が非常に充実していた。医者が 1 人と PT が 6 人そしてマッサージ師、physiologist（主に選手の体の状態を測定する）などがある。Physiologist の測定は、運動プログラムを決めるのに非常に重要な役割を果たしている。PT の主な仕事は、けがをした選手の復帰だそうだ。医者への地位らしく非常に高い地位であることが知ることができた。こちらには日本のラグビー選手も来ている。

<Fiona Stanley Hospital>

Fiona Stanley Hospital は西オーストラリアでは唯一心臓移植と出産が行える病院であるため、西オーストラリアの遠いところからも多くの人々が飛行機などで訪れる。最初に見学したのは教育棟で、講義やトレーニング、シミュレーションなどを行う。呼吸、瞬き、会話をし、心拍のある人形を使った心臓マッサージや人工呼吸のトレーニングは全スタッフが行うことができ、その人形の状態も指示室でスタッフが操作して決めるという。次に病棟を見学した。毎フロアに training room があり、ここでリハビリテーションや筋力トレーニング、思考力のテストも行えるという。次はオーストラリアの先住民であるアボリジニの人々のケアを行う施設について説明していただいた。メンタルケアや、糖を多く摂取する食文化による糖尿病の治療など、アボリジニの人を総合的にサポートする施設ということだった。最後にリハビリ棟を見学した。こちらは先ほどの病棟よりも慢性の病気で、より長いリハビリテーションが必要な患者のための施設である。今回はその中の一つであるプールを見学した。プールでのリハビリテーションは適度な水温下で筋がリラックスした状態で行うことができる。何よりも患者自身が楽しんでリハビリに取り組めるため、その効果は大きいということだった。

<The Niche (Independent Living Centres)>

ILC とは、オーストラリア各地からメンバーを募ったネットワークであり、最先端で、集合的で、平等な助力技術を発展させることを目的とした団体である。施設に合ったベッドはむくみ防止のために足の部分だけ高さを変えられたり、お世話をする人の腰の負担を軽減するためにベッドそのものの高さを変えることができたりと見たことの無い機能もついていた。このように機能が多くついたベッドは価格も高く、すべての人が手に出来るものではないとも説明してもらった。

次は移動用の電動カートを見学した。オーストラリアでは日本よりも電動カートでの移動が当たり前のように行われていたように感じる。そのためか種類も多く、長距離用の大きいものと短距離用の小さいものとに大別された。

次はキッチンを見学した。小物だけでなく蛇口の上の食器棚が上下するシステムもあり、障害のある人のためにキッチンをまるごと作り変えることも必要であると言っていた。

次に見学したのは言語聴覚障害の人のための器具で、視線によって言葉を入力する機械や指差しによって意思を示すシートは日本でも見たことがあった。しかしシートはより種類が豊富で患者の様々なニーズに対応していたように思う。

最後に車いすと歩行器を見学した。サイズや用途がそれぞれで実に多くの種類が置いてあ

った。車いすに限らず、ILC ではハイテクからローテクまで様々なニーズに合わせた様々な器具、設備が整っており、病院スタッフにそれらの使い方を学んでもらうのも ILC の役割の一つということだった。

2. Curtin 大学での授業・交流・見学

<英語の授業>

1 週目は、信大生のための英語の授業があった。オーストラリア英語、オーストラリアの文化、アボリジニの文化などについて教わった。また、ホームステイ先でのホストファミリーとの会話で役立つ表現なども教わり、授業内でそれら表現を使って英会話の練習も行った。2 週目は、ELICOS (English Language Intensive Courses for Overseas Students) という、様々な国からの留学生が受講している英語の授業を受講した。

<Curtin Japanese Club の学生との交流>

カーティン大学で日本語・日本文化を学んでいる学生と交流し、親交を深めた。

<Curtin Simulation Lab の見学>



ここでは、呼吸などをする人形を利用した心臓マッサージと人工呼吸の練習が行われており、その部屋に取り付けられたビデオカメラで練習の様子を撮影し、練習の動きを自分で再確認できるということだった。また、注射の練習は主に看護師が練習するが、緊急事態のために PT、OT も練習を行っているという。一部屋取り付けられているコミュニケーションルームでは、メンタルケアだけでなく、コミュニケーションの訓練や英語以外を第一言語とする人の英語の訓練も行っているということだった。

実習するための設備が整っていることはもちろんのこと、ビデオカメラや片側から透けるガラス張り等によって手本を見せながらの講義をするための設備もよく整っていた。

3. その他

<観光>

スワンバレーに行き、スワンバレーで有名なチョコレートとワインの施設を見学した。チ



ョコレートの施設では種類豊富なチョコレートがあり、他にもハチミツやジャムがあり、沢山のお土産を買った。ワイナリーでは今まで飲んだことのない様々なワインを試飲することができてとても面白かった。他



にもカバシャムワイルドライフパークへ行きカンガルーと触れ合ったり、コアラやウォンバットなどと記念撮影したりすることができた。ショーでは羊の追い込みから毛刈りやカウボーイの鞭さばきを見ることが出来た。どれも初めての経験だったのでとても新鮮で面白かった。また、パース市街地やフリーマントルへ日本語クラブで知り合った人たちとお土産を買いに行ったり、有名な店を回ったりした。フリーマントルのフィッシュアンドチップスの店で食べた料理はとても美味しかった。ロット

ネスト島のツアーは当初行く予定だった日が雨の予報だったので日をずらして帰国する前日に行った。ロットネスト島ではサイクリングをしながら、休憩がてら海を見たりクオッカと写真を撮ったりした。ロットネスト島の海はとても透き通っていてオーストラリアが冬でなければ入って泳ぎたくなるようなきれいな海だった。クオッカは店で売られているぬいぐるみよりも実物の方が可愛く、沢山の写真を撮った。

<ホームステイ>

ホームステイは、初めての経験の人も多く、初対面の家族の家で2週間も生活するというのを不安に感じている人は多かった。しかし、実際はホストファミリーの方は暖かく迎えてくれ、すぐに交流を深めることとなった。観光に連れていってくれたり、たくさん話しかけてもらったことにより、交流ができ、英語を使う機会というのも自ら増やして行けたのだと思う。また、ホストファミリーは、精一杯の英語を根気よく聞いてくださったので、自分の英語力にふがいなさを感じつつも伝えきることができ、喜びも感じることもできた。これらを通じて、少しは自分の英語力も向上したのでは内かなと思う。また、日常生活を経験するうえで日本との違いを多く感じた。テレビなどで土足やシャワー等、違いを知る機会があったが、実際に経験してみるとその違いというものをありありと実感した。土地が広いせいか、平屋ですごく大きな家で、しかし、家族の声がどこにいても聞こえるような作りなのが素敵だと感じた。各々の家での役割も決まっており、それぞれが自分のやるべきことを全うしているのが良いところだと感じた。

このように実り多い経験ができたのは、信州大学や Curtin 大学の先生方、家族、ホームステイ先の家族、その他にも多くの方々にサポートして頂いたからこそだと感じている。感謝を述べるとともに、この経験を今後活かしていきたい。

以上、カーティン大学 夏期海外単位認定プログラム

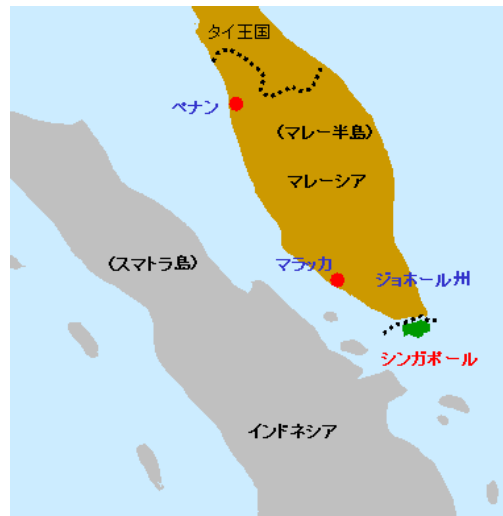


V. 信州大学—シンガポール共和国

夏期海外研修保健医療スタディツアープログラム

Shinshu University, School of Medicine, School of Health Sciences

—**Republic of Singapore**



2017

1. シンガポール共和国の概要

1) 一般情報

1. 面積

約 716 平方キロメートル（東京 23 区と同程度）

2. 人口

約 540 万人（うちシンガポール人・永住者は 384 万人）（2013 年 9 月）

3. 民族

中華系 74%、マレー系 13%、インド系 9%、その他 3%

4. 言語

国語はマレー語。公用語として英語、中国語、マレー語、タミール語。

5. 宗教

仏教、イスラム教、キリスト教、道教、ヒンズー教

6. 略史

1400 年頃 現在のシンガポール領域にマラッカ王国建国。

1511 年 マラッカがポルトガルに占領され、マラッカ王国が滅亡。

マラッカ王国の王はマレー半島のジョホールに移り、ジョホール王国を建国。それに伴い、ジョホール王国によって現在のシンガポール領域が支配される。

1819 年 英国人トーマス・ラッフルズが上陸。ジョホール王国より許可を受け商館建設。

1824 年 正式に英国の植民地となる。

1832 年 英国の海峡植民地の首都に定められる。

（1942 年～1945 年） （日本軍による占領）

1959 年 英国より自治権を獲得、シンガポール自治州となる。

1963 年 マレーシア成立に伴い、その一州として参加。

1965 年 マレーシアより分離、シンガポール共和国として独立。

7. 政体

立憲共和制（1965 年 8 月 9 日成立）（英連邦加盟）

8. 元首

大統領（任期 6 年）、

他、参考 URL 参照 <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/singapore/data.html#01>



2) 主な研修エリア

チャイナタウンを基点に、研修先は地下鉄で10分～30分程度。
活動エリアはシンガポール全体。

2. 保健医療スタディーツアープログラムの概要

1) 目的

異文化での学習・生活体験を通じて、国際的視点から医療者としての態度を涵養する。
シンガポールでは、シンガポール市内およびシンガポール総合病院の保健・医療現場の見学や体験から、開発途上国の保健医療の現状を理解し、将来国際保健・医療を担うことのイメージを広げる。

2) 目標

- ① 異なる医療システムのもとでの協働のあり方を理解する。
- ② 英語を使用する環境のもとで、生きた英語を修得する。
- ③ 他人種との交流を通して、異文化理解の一助とする。
- ④ 国際人としての態度を自ら育てる。

3) 研修期間

平成29年8月4日（金）～8月12日（日）（9日間）
参加者出国日 H29年8月4日
参加者帰国日 H29年8月13日
現地活動期間 H29年8月4日 ～ H29年8月12日（9日間）

4) 主な研修先

市内の複数種類の総合病院や教育機関を見学し、専門職等の実際や学習環境を知る。
SGH: Singapore General Hospital
SIT: Singapore Institute of Technology
Bright Vision Hospital
KKH: KK Women's and Children's Hospital

5) 参加人数

看護2名（3年生1名、2年生1名）、検査技術1名（3年生1名）、作業療法2名（3年生2名）、
合計5名

6) 担当教員

引率：青木 薫 准教授
国内・学内サポート：国際交流委員会（杉山、伊澤、山崎浩司、山崎明美、奥村、小穴、Goh、
佐賀里、川船(学務第二)）

7) 研修費用

①研修費用概要

渡航費用：	約 87,400 円
宿泊費用：	約 32,000 円
保険料：	6,700 円
研修費（SGH 他研修機関およびバス移動費）	21,700 円
J-TAS 料金	3,400 円
シンガポール国内交通費	約 2,000 円
日本国内交通費	約 20,000 円
<hr/>	
合計	約 173,200 円

②研修支援

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）の平成 29 年度海外留学支援制度（短期派遣）に応募、採択された。参加学生 5 名のうち、審査基準に則り 5 名全員に 10 万円の奨学金が支給された。

8) リスク管理体制

平成 23 年度からは、信州大学が正会員となっている特定非営利活動法人海外留学生安全対策協議会（The Japanese Council for the Safety of Overseas Studies; JCSOS）の緊急事故支援システムに加入し、研修中の不慮の事故に対するリスク管理体制を強化した。本年度も当支援システムに継続して加入のうえ、プログラムを実施した。加えて、学生・教員全員が同じ旅行保険に加入した。

3. 研修プログラムの詳細

1. 研修先の概要

1) シンガポールの教育

今回訪問したシンガポールは国際都市であり、その教育や医療は国際的かつレベルが高い。その理由として、シンガポールは資源を持たない小国であることが挙げられる。資源の乏しいシンガポールでは、人々の働きによって何らかの「価値」を作り出さなければたちまち貧しくなってしまうという危機感がある。グローバル化が進む中で、全世界的に有力な企業の拠点をシンガポール誘致するというのは非常に重要なことになっている。そのような産業的な要請の流れの中で研究者・専門家の誘致も戦略的に考えられている。

加えて、複数の民族が共存することから、国を維持するために教育は大変重要な課題である。国家予算に占める教育費の割合が防衛費に次いで第二位であり、政府が教育に重点的に投資していることがわかる。

シンガポールでは小学校から厳しい選抜が行われ、優秀な生徒をエリート教育するシステムが整っている。シンガポールの基本的な教育制度は、小学校（Primary School）6 年、中学校（Secondary School）4 年、ジュニアカレッジ（Junior College）2 年、大学（University）4 年というコースである。進学するたびごとの選抜システムが特徴的である。シンガポール政府のホームページに詳しい記載がある。

さらに、大学、中でも Ph. D. コースの大学院生や研究者に関しては、海外から研究の場を求めてシンガポールへと来た方が非常に多い。また、組織のトップにアメリカやイギリスで教育を受けたトップクラスの研究者が多く、その理由の一つは、優秀な研究者が来れば、良い研究ができるだろうということのようだ。次に、英語ができることである。英語ができるというのは、単純に研究についてのコミュニケーションが英語でとれるということではなく、あらゆるコミュニケーションにおいて英語を使ってまったく不自由を感じないという意味が重要視される。シンガポール人は英語が話せるので、組織内でのコミュニケーションには困らず、欧米の研究者や専門家とのコミュニケーションにも困らないことによる様々な恩恵が見込めるといえることのようなのである。

シンガポールの大学院は世界中の学生を積極的に呼び寄せている。奨学金制度が充実し、レベルの高い研究が出来るシンガポールには世界中から学生が集まってくる。なかでも、中国からの留学生が多い。

このようなシンガポールには、1905年に創立されたシンガポール国立大学 (National University of Singapore)をはじめとして、南洋理工大学 (Nanyang Technological University)、シンガポール経営大学 (Singapore Management University) など、7つの大学がある (2016年8月現在)。このうちのシンガポール国立大学の附属病院には、2014年に訪問見学した。

大学のほかに、ポリテクニク (Polytechnic) と呼ばれる。高等技術専門学校や高等専門学校と訳される3年制の学校で diploma を取得できる。ポリテクニクは職業に直結するような高度な専門知識を学び、日本でいえば高等専門学校のようなものである。訪問先の NYP (Nanyang Polytechnic) がこれにあたる。尚、NYP の理学療法・作業療法・放射線学科等は、2017年度より、SIT: Singapore Institute of Technology に移管される。

2) シンガポールの医療

シンガポールの医療は元々医療水準の高い都市であるが、さらに国策として外国の医師免許 (条件付き) を認めていることで、外国人医師も多く、同時に外国人の医療従事者も多くいる。

私立総合病院の経営システムは日本と異なる。シンガポールの私立病院では、OPEN SYSTEM を採用しており、各専門医は独立した開業医として、病院内の施設をテナントとして借り受けてクリニックを開業しており、検査や処置、入院が必要な時は病院の施設を借りて行う。また、各クリニックのスタッフは医師が直接雇用しており、運営や診療方針も全てその医師に委ねられている。

公立病院は日本の総合病院と同じシステム (CLOSED SYSTEM) で医師もそれぞれの病院に所属しており、ひとつの病院で検査から治療、入院まで全て行うことができ支払いも一度で済ませることができる。訪問先の SGH は CLOSED SYSTEM である。

3) 訪問先 SGH: Singapore General Hospital

SGH は 1821 年創設のシンガポールでは一番歴史があり、最大である。と同時に、アジア圏においても最大規模であり、高度な医療技術と豊富な人材を誇る。1900 年代初頭に医療と看護の学校が設立されて以降、SGH は医療教育の中心になっている。多くの優秀な医療従事者を輩出し、国内の学部生、大学院生そして医療専門スタッフの教育に携わっている。国外からの研修生の受け入れも行なっている。

キャンパスの広さは 18 ヘクタール、SGH だけで 8 ブロックある。シンガポールでは第 3 次救急病院としての役割を持った最大の病院で、5 つの専門領域の医療センターを擁する。

約 2000 床のベッド数と 600 名以上の専門医、約 4000 名の看護師、他専門職を抱え、年間約

7 万人以上の入院患者、約 100 万人の外来患者に対し、約 1 万人のスタッフで対応している。

35 の診療科目の他、病院敷地内にある 5 つの専門医療センター、眼科、循環器、がん、歯科、脳血管疾患のセンター棟があり、患者は専門治療を受けることができる。さらに、来る高齢化社会に備えて、2016 年に地域ケア部門を設置した。

また、院内には、現任教育専従担当者がおり、その担当者が院内専門職のみならず、外部からの様々な研修生の対応も行うシステムが構築されており、今回の本学の研修でも担当していただいた。大規模かつ最先端の医療水準を保持しようとする院内システム、加えて、高い水準のサービス提供への誇りとそれを支える専門職現任教育システムを維持している。

HP: <http://www.sgh.com.sg/Pages/default.aspx>



Singapore General Hospital 初日オリエンテーション



4) 訪問先 SIT : Singapore Institute of Technology

SIT は 2009 年に設立されたシンガポール 5 つ目の大学であり、Polytechnic 等を卒業した学生に、さらに高度な専門教育を提供している。シンガポール内に 6 つのキャンパスを持ち、約 4000 人の学生の教育を行っている。国際交流にも力を入れており、10 校の海外大学と提携を結び、学生の研修プログラムが提供されている。医療系では、看護、理学療法、作業療法、診断放射線、治療放射線の学科を有している。

HP : <http://www.singaporetech.edu.sg/>

5) 訪問先 NYP : Nanyang Polytechnic (School of Health Science)

NYP は 1992 年に創設された。ヘルスケア科とビジネス科から始まり、翌年、エンジニア科や IT 科も設置され、その後いくつかの科が増設されてきた。30 ヘクタールのキャンパスに、15000 名の学生、1300 名のスタッフを擁する。

ヘルスケアの分野には、看護、歯科衛生、社会福祉、理学療法、作業療法、診断 X 線撮影と放射線療法の専攻が設置されている。各学年の学生数は、理学療法・作業療法は約 100 名、看護は約 650 名。看護専攻の場合、最大規模の教室での収容人数が 280 名のため、1 学年につき同じ内容の授業を 3 回提供している。理学療法・作業療法は、2014 年 9 月入学生から、アイルランドのダブリン、トリニティカレッジとの提携により大学化された。

HP : <http://www.nyp.edu.sg/shs/school-of-health-sciences>

理学療法→Trinity College Dublin, Diploma in Physiotherapy in NYP, Singapore

<https://medicine.tcd.ie/physiotherapy/singapore/>

6) 訪問先 Bright Vision Hospital

BVH は、コミュニティ病院に位置付けられる約 300 床の病院である。1 年につきおよそ 1200 人の新しい患者に中長期のケアサービスを提供している。

BVH は、患者の身体的かつ精神的、スピリチュアル、社会的な健康について、統合された健康プログラムを提供している。

BVH の概要紹介ビデオは URL 参照。

HP : <http://www.bvh.org.sg/about-bvh/bvh-story.html#null>



2. 研修プログラム

Shinshu University Student Visit 7-11 Aug 2017 Programme Schedule

7 Aug (Monday)

Time	Activity
1000 - 1045	Welcome & Orientation (Bowyer Block B-3-4) Overview of SingHealth and Healthcare policy in Singapore
1045 - 1100	Corporate Video Presentation
1100 - 1200	Lunch
1200 - 1230	LIFE Centre
1230 - 1300	Academia - Nursing simulation rooms
1300 - 1335	Academia - SingHealth Duke NUS Institute of Medical Simulation
1335 - 1345	Walk to NHC Rehab Centre at Level 7
1345 - 1400	NHC Level 7 - ST
1400 - 1430	NHC Level 7 - OT
1430 - 1500	NHC Level 7 - PT
1500 - 1530	Tour of SGH museum
1530	End of visit

8 Aug (Tuesday) – Nursing Group

Time	Activity
0730 - 0745	Pick up from hotel
0745 - 0800	Arrival at Connection 1 Tower 5
0800 - 1200	Basic Cardiac Life Support and Automated External Defibrillation (BCLS-AED)
1200 - 1300	Lunch
1300 - 1400	Sharing & Learning on Department Operation: <ul style="list-style-type: none"> • Hospital Tour (Level 1)
1400	End of Visit Departure at SGH Block 7

8 Aug (Tuesday) – OT Group

Time	Activity
0900 – 1600	1 day attachment at OT

8 Aug (Tuesday) – Biomed Group

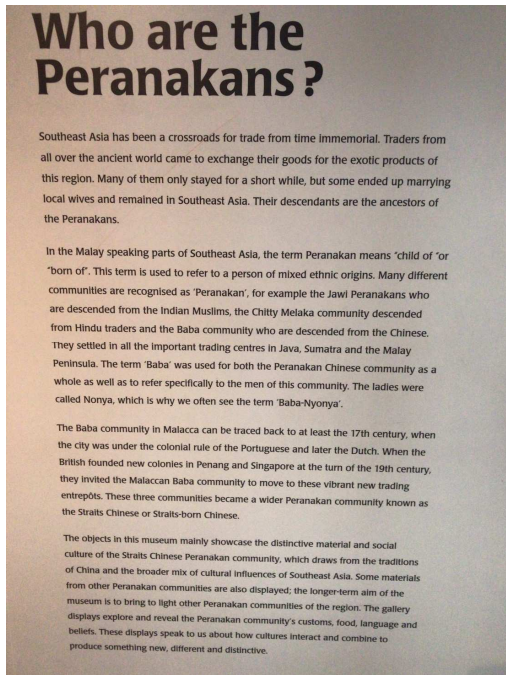
Time	Activity
0900 – 1600	Visit to Diagnostic Bacteriology
1030 - 1200	Visit to Virology
1200 - 1400	Lunch
1400 - 1530	Visit to Immunology & Serology
1530 - 1700	Visit to Blood Bank

9Aug (Wednesday)

シンガポールの文化を学ぶ：プラナカン博物館、国立博物館等見学

10 Aug (Thursday)

Time	Activity
0930 – 0940	Meet & Greet
0940 – 1000	Introduction: Bright Vision Hospital
1000 – 1020	Introduction: Nursing Roles
1020 – 1040	Introduction: Rehabilitation Roles
1040 - 1130	BVH Tour
1130 - 1330	Lunch & travel to KKH
1330 - 1335	KKH
1335 - 1400	Introduction to KKH
1400 – 1430	Visit Ward 55 (Paed)
1430 – 1500	Visit Ward 71 (Gynae)
1500 – 1530	Visit Rehab Gait Lab
1530	End of day



Peranakan Museum

4. 学生アンケート【5名】

専攻/参加者数	1年	2年	3年
看護学専攻		1	1
検査技術科学専攻			1
理学療法学専攻			
作業療法学専攻			2

I 出発前の準備について

1. 研修プログラムへの参加動機

- ・海外の医療現場を見学し、日本の医療との違いを知りたかったから。また、日本国外の文化に触れることで様々な視点から物事を見られるようになりたかったから。
- ・自分が英語をより話すことが出来るようになりたかったから。
- ・医療機関や教育機関の見学を通して、日本との違いを知りたかったから。
- ・海外の医療現場を見学して国際意識を高めるとともに、英語の勉強をしたかったから
- ・海外研修へ行った先輩からこの研修プログラムの話を聞くうちに自分も大学生のうちにいろいろな経験をして視野を広げたいと思ったから。また、普段の生活の中でもやりたいことはたくさんあるが思い切って行動出来ずに終わってしまうことが多かったのでこの機会に何か行動に移そうと考えたため。

2. JCSOS または短期海外活動支援の補助金以外の費用の捻出方法

- | | | | |
|------------|-----------|---------------|--------|
| 1) 家族が全額負担 | 2) 自己資金のみ | 3) 自己資金と家族の補助 | 4) その他 |
| 1人 | 1人 | 3人 | 0人 |

3. 渡航前の自己学習

1) 自己学習をした人 【5人】

学習内容

- ・シンガポールの医療制度の概略
- ・日常英会話
- ・それぞれの病院の特徴をネットで検索した
- ・eALPS やオリエンテーションで提示された資料に目を通した。
- ・シンガポールの基礎情報（観光地や食べ物）や研修先の医療について
- ・医学英単語、シンガポールの医療制度

2) 何もしなかった人 【0人】

4. 研修プログラムの説明会の時期

- | | | |
|----|-----|----|
| 適切 | YES | 5人 |
| | NO | 0人 |

5. 参加申し込み締切の時期

- | | | |
|----|-----|----|
| 適切 | YES | 5人 |
| | NO | 0人 |

6. オリエンテーションについて

1) 時期

適切 YES 5人
NO 0人

2) オリエンテーションの内容

適切 YES 5人
NO 0人

II ホームステイについて (カーティン大学プログラム参加者のみ回答)

III J-TAS の利用状況について

海外留学生安全対策協議会 (JCSOS) が提供しているサポート (J-TAS) について

1. 日常生活面について相談できる「海外危機管理サポートデスク」及び健康面について相談できる「海外健康相談サービス」について、利用の有無。

利用した 0人
利用していない 5人

2. これらのサービスが利用出来る状況があつて、良かったと思いますか？

利用出来なくても問題なかったと思う 0人
どちらともいえない 2人
利用出来る状況があつて良かったと思う 3人

IV レンタル携帯電話の利用状況について (カーティン大学プログラム参加者のみ回答)

V 研修コースについて

1. 英語及び医療英語の授業について (カーティン大学プログラム参加者のみ回答)

2. 英語以外の授業についての満足度 (人数)

	非常に 不満	やや 不満	どちらとも いえない	やや 満足	非常に 満足
①始業時間, 授業の時間について	1		1	1	1
②授業の内容について			1	2	1
③授業のレベルについて			1	3	
④全体としての満足度			1	2	1

※1名が回答していない

3. 施設などの見学（体験含む）について

	非常に満足	やや不満	どちらともいえない	やや満足	非常に満足
①見学の時間について				5	
②見学の内容について				5	
③見学説明のレベルについて			1	3	1
④見学施設について			1	2	2
⑤全体としての満足度		1		4	

1) 全体としての満足度が“やや不満”または“非常に不満”だった内容

- ・SGHの専攻別では病棟見学をしたかった。看護師が病棟でどのように患者と関わっているのかなど勤務されている実際を見てみたかった。
- ・講習を見学するだけでなく、実際に体験できるのであれば別だが、医療従事者向けのBLS講習に参加させていただく機会は、資格取得後でも構わないと思う。

2) 一番印象に残った見学先とその理由

- ・KKH 婦人科と小児科の病棟を見学させていただき、日本との規模の違いや設備の充実さが印象に残ったから。
- ・SGH（3人）各専攻に分かれての研修だったのでそこで個別でも詳しく知ることができた。
シンガポールの医療を学ぶ上では欠かせない場所であると考えられるため
特に2日目の専攻別の研修で1人の学生に対して1人の作業療法士が担当してくださり、さらに臨床の様子も実際に拝見することができたから。
- ・BVH 看護師資格の種類や勤務形態について知ることができ、療養環境や設備など病棟見学を通して日本との類似や差異を実感することができた。英語が聞き取りやすかった。

4. (1) 英語を使っただけの会話について

まったく積極的に行えなかった	あまり積極的に行えなかった	どちらともいえない	やや積極的に行った	とても積極的に行った
	1		3	1

(2) 今後、英語力アップのため、TOEICやIELTSなどの英語試験を受けようと思いますか

まったく思わない	あまりそうは思わない	どちらともいえない	ややそう思う	とてもそう思う
	1	1	1	2

5. コースを通して、よかったこと

- ・病院見学や学校見学はもちろんだが観光の時間を多くとることができ、日本とは異なる文化を体感することができたこと。
- ・英語を実際に使用することで自分の現在の能力を知ることができた。また、病院の研修で

日本との違いを詳しく知ることができたこと。

- ・施設見学だけでなく、観光にも十分な時間があり、シンガポールを満喫することができたこと。
- ・日本にはないような設備や機器を見ることができたこと。
- ・シンガポールと日本の医療や教育の違いを肌で感じるすることができたこと。
- ・もっと英会話ができるようになりたいということを実感できたこと。
- ・海外の医療現場を知ることで、より日本の医療について知ることができた。今後のえ勉強や実習への意欲が高まった。
- ・一週間の中で研修も充実していたし、観光もかなり楽しめたことが良かった。さらに一緒に行ったメンバーとはじめはお互い緊張して話すことが少なかったけれど、研修や観光の中で相談したり意見を出し合ったりしていくうちにみんなが打ち解け、全員で協力して過ごすことができた。研修中は英語での説明で自分の英語の出来なさに気づき、これから少しずつ英語の勉強もしていこうと思えました。

6. コースを通して、困ったこと

- ・スマートフォンを持っていたが、無料 Wi-Fi のある場所でしか連絡を取ることができなかったので、はぐれた時の連絡をすることが出来なかったこと。(研修後、時間の異なる2つのグループでの待ち合わせだったため、1人での行動ではなかったため大事には至らなかったが、普段自分がいかに携帯電話に頼っているかがわかった。)
- ・普段使用しない言語を使うのでコミュニケーションを上手くとることができないので、自分が思っていることを思うように話すことができなかったこと。
- ・作業療法士など、他専攻のことを英語で理解することや日本の現状と比較することは困難だと感じた。
- ・英語での会話がスムーズにできず、本当に伝えたいことが伝わらないことがあった。
- ・コース中ではないが、研修の出発がテスト後すぐということもあり、準備などに少し苦労した。2-3日余裕があると嬉しかった。

7. コースについての要望

- ・テスト終了後すぐの開催では十分な準備ができないため、開催時期を遅らせて欲しい。
- ・研修先までの移動が車でとても便利でした。
- ・SGHにて病棟見学ができなかったこと残念。また、SITへ学校見学に行ったので学生とも交流ができたら良かったと思った。開催時期について、テスト期間直後であったため事前に十分な学習ができずに研修へ行くことになってしまったので夏休み開始して少し時間をおいてからの研修のほうが良いと思った。
- ・少し金額が上がってもよいので、ホテルをランクアップしてほしい。せめて、スーツケースを広げられ、換気できるような部屋が良い。住環境を整えることも体調を整えることにつながると思う。
- ・SGHの専攻別の内容を考慮してほしい。看護の実習は病棟が多いので、外来だけでなく病棟見学があると日本との違いを学ぶことができると思った。
- ・テスト期間終了後の海外研修は体調を崩しやすいのではないかと思う。テスト終了1週間後など、少し期間を考慮していただきたい。

8. 研修全体に対する評価

	大変悪かった	悪かった	どちらともいえない	よかった	大変よかった
①実施時期について	2		3		
②期間について				4	1
③コースの構成について				5	
④研修先のスタッフについて				3	2
⑤信州大学の教官の対応				1	4
⑥全体としての評価				4	1

9. 今回の経験の意味 また、今後の学習・進路などへの影響

- ・研修前は自分の英語の能力に自信がなかったが、研修先で自分の英語が通じたのでうれしく思った。英語で話すこと、海外へ行くことへの抵抗が少なくなったと感じられるのでこの感覚を忘れないようにしていきたい。
- ・今後の学習で自分のスキルの一部として組み込まれると思うし、モチベーションの向上につながると考えられる。大学病院の実習でも今回研修したところと比較しながら見ていくことで理解が深まると考えられる。
- ・異文化に触れることができた。シンガポールは多民族国家であり、英語を日常的に使用している。日本にいるとすべてを母国語で済ませられるため、日常で英語を使用しなければ身につかないことを実感した。英語を上達させるためにもっと海外へ行ってみたいと思った。日本の医療を海外の人たちに説明することができるように、看護と英会話を勉強し続けたい。
- ・今後の勉学や実習への意欲が高まったとともに、海外でも活躍できる臨床検査技師になりたいと思えたこと。国内以外への進路も視野に入れたい。
- ・今回の研修では海外での病院の様子を目にすることができたり、英語を使って実際に海外の人とコミュニケーションがとれたことで視野が広がり、英語の重要性を知った。今後学習面では疑問や興味に対して自分から積極的に勉強したり、英語の勉強を短時間でも取り入れたりしていこうと思う。生活面では自分で壁を作らずにいろいろな人と関われる機会を見逃さないようにしていきたい。また、今回の研修で一緒に行ったメンバーの皆さんで、困った時や迷った時に協力して助け合っていくことの大切さを学ぶことができ、今後チームでの医療を大切にしていきたいと強く思った。

10. 今後の留学生受け入れプログラムに対する興味について

是非参加したい	興味がある	あまり興味がない
2	2	1

以上、シンガポール夏期海外研修保健医療スタディツアープログラム

【編集後記に代えて 国際交流委員会委員長】

本年度の夏季海外研修プログラムが無事終了し、報告会および実施報告書もつつがなく実施、作成されました。本年度はオーストラリアカーティンプログラムへの教員の帯同を中止しました。海外留学生安全対策協議会（JCSOS）が提供するサポート（J-TAS）、全参加者に加入を義務づけた海外旅行保険のサポート、ホームステイ責任者やカーティン大学責任者など従来 of 安全確保体制に加えて、保健学科独自の危機管理マニュアルを整備し、十分な準備を持って臨みました。その結果、プログラムすべての日程を学生の力だけで成し遂げ、全員無事帰国することができました。回数を重ねるにつれ、学内・外の状況も変遷がみられます。これまでの資産をいかしつつ、本学科としての今後の海外研修を展開できますことを祈念しております。

最後になりますが、参加学生にとっての大きな糧となった本プログラムの実施に際して御協力・ご支援いただいた関係諸氏、保健学科同窓会および保護者の皆様に深謝申し上げます。
(平成 29 年度国際交流委員会委員長 杉山暢宏)



.....

「信州大学医学部保健学科平成 29 年度夏期海外研修プログラム実施報告書」

2017 年 11 月 30 日

発行責任者：金井 誠

編 集 ：平成 29 年度医学部保健学科 国際交流委員会

発 行 ：信州大学医学部保健学科

.....